

学習内容報告書 フォーマット

学校名	はけみや保育園
授業者	田端 桃佳・平田 洋介・(外部講師) 浪崎 直子

1. 単元計画

実施した活動内容に基づきご記入ください。

1-1. 単元名

身近な海や川との関わり方を自然の恵みと災いの両面から学ぶ

1-2. 学年

5 歳児

1-3. 教科（単元を実施する教科を全てお書きください）

5 領域における環境（身近な環境とのかかわりに関する領域）

1-4. 単元の概要

本園は、充実した日々の暮らしを通して「生きる力」を育むことを保育目標とし、友だちとの関わりの中で、ともに育ち学び合うこども、思いやりと助け合う心をもったこどもの育成に力を入れている。本単元では、令和 2 年の熊本豪雨で、海からのバックウォーターで水害に見舞われたあしきた・まちのこども園の 5 歳児と本園 5 歳児が交流する。交流では、あしきた・まちのこども園のすぐ近くにある河口干潟で、シオマネキ観察会を実施し、干潟のすむ生き物に関心をもつことで、海や川の恵みに目を向ける。また、あしきた・まちのこども園の水害の体験を共有し、海や川の災いについて学ぶ。さらに事後学習では、海産物を用いて魚の料理体験を実施し、海の恵みに目を向ける。これら活動を通して、身近な海や川との関わり方を自然の恵みと災いの両面から学ぶことを目的とする。

1-5. 単元設定の理由・ねらい

気候変動により今後増えると予想される水害への防災意識を高めると共に、海での自然体験や料理体験を通して自然との関わり方を考え、自然の大切さを感じられるようになる。

(ねらい)

- ・身近な海と川に親しみ、触れ合う中で、自然の中で過ごす喜びを味わう。
- ・友達と積極的に関わり、喜びや悲しみを共感し合う。
- ・海の生物の形、色、大きさ、体の仕組みなどに関心をもち、生命の尊さに気づく。

1-6. 育みたい資質や能力、態度

しおまねき観察会と魚の料理体験を通して、海や川の恵みを感じることができるようになる。
水害をより身近に感じ、防災意識が高まる。

1-7. 単元の展開（全 13時間）

時数	学習活動・主な内容	教師の指導 / 主な評価 外部連携 / 使用教材等
1	<p>1. <事前学習>身近な川と海のお話し会 自然の恵みと災いの両面を学ぶため、身近な川と海のお話し会を実施する。</p> <p>はけみや保育園近くにある坪井川の位置をグーグルアースで確認しながら、坪井川でカメを釣った経験を皆で改めて確認する。</p> <p>交流するあしきた・まちのこども園が2020年の熊本豪雨で被災したこと、園の近くにある佐敷川と八代海について学ぶ。</p> <p>海の世界連鎖カードを使って、海の生き物と人間との繋がりを学習する。</p> <p>干潟の大型ジグソーパズルを全員で完成させ、干潟にすむ生き物について学習する。</p>	<p>教師の指導：芦北での活動を楽しみにする気持ちを育む。</p> <p>主な評価： ・興味をもって話を聞くことができる。 ・友達と協力してジグソーパズルなどに取り組むことができる。</p> <p>外部連携：浪崎直子氏（在園児保護者）</p> <p>使用教材：スライド・Lab to class 世界連鎖カード・干潟ジグソーパズル</p>
8	<p>2. あしきた・まちのこども園との交流・しおまねき観察会 バスであしきた・まちのこども園を訪問する。 バスの中では海の生き物クイズを実施する。 あしきた・まちのこども園の園長先生より昨年の熊本豪雨の被害についてお話を聞く。 「やおやのお店やさん」の手遊びを、魚屋さんや水族館のバージョンに変えて実施し、交流する。 佐敷川緑地公園で昼食後、河口干潟でしおまねき観察会を実施し、干潟にすむ生物を観察・採集する。 採取した生物の一部は園に持ち帰り飼育する。 体験後、振り返りとして芦北の海の絵を描く。</p>	<p>教師の指導： ・安心して交流ができるようにグループを編成・教員を配置する。 ・軍手・マリンシューズを着用し、牡蠣殻などで怪我をしないよう注意を呼びかける。</p> <p>主な評価：積極的に活動に参加する。</p> <p>外部連携：あしきた・まちのこども園・松本雄輔氏（あしきた青少年の家）・浪崎直子氏</p> <p>使用教材：Lab to class 海の生き物カード</p>
4	<p>3. <事後学習>お魚さばき体験・お魚クッキング 近所の鮮魚店に歩いて魚を買いに行く。 今回は、カツオ・サワラ・ヒラメ・シマアジ・マダイ・ヤリイカの6種類の魚を購入した。 購入した魚でお魚さばき体験・お魚クッキングを行う。 鮮魚店を営む在園児保護者の江浦氏の協力を得て魚のさばき方を学ぶ。 マダイの鱗とりやヤリイカの手捌きを体験する。 照焼きや味噌焼き、イカの酢の物、荒汁などを作る。 絵本の読み聞かせを行い、海の恵と災いについて振り返る。</p>	<p>教師の指導： ・魚の形、色、大きさ、体の仕組みなどに関心をもたせる。 ・調理器具などで怪我をしないよう、児童はキッチンバサミと鱗とりのみで行う。</p> <p>主な評価：積極的に調理に参加する。</p> <p>外部連携：えうら鮮魚店・浪崎直子氏</p> <p>使用教材：鮮魚店で購入した海産物（カツオ・サワラ・ヒラメ・シマアジ・マダイ・ヤリイカ）</p>

2. 学習活動の実際

実施した単元中のキーとなるような時間（導入の時間・主となる活動の時間・まとめの時間など）の学習内容をご記入ください。また、複数の時間についてご記入いただける場合には、この項目をコピーして複数記入していただいて構いません。

2-1. 単元における位置づけ

単元 時間中の 時間目

※例：単元 10 時間中の 2 時間目 / 単元 15 時間中の 4, 5 時間目

2-2. 本時の目標

あしきた・まちのこども園との交流・しおまねき観察会を体験し、友達との関わりの中で自然との関わり方を考え、自然の大切さを感じられるようになる。

（ねらい）

- ・身近な海と川に親しみ、触れ合う中で、自然の中で過ごす喜びを味わう。
- ・友達と積極的に関わり、喜びや悲しみを共感し合う。

2-3. 本時の展開

主な学習活動 / 反応	教師の指導・支援 / 評価の視点（方法）
1. 朝のお集まり 今日一日の流れ、注意事項を確認する。	教師の指導： ●児童の健康状態を確認する。
2. バスに乗車する バスの中では、海の生き物クイズを実施し、気分を高める。途中トイレ休憩をとる。	●安心して交流ができるようにグループを編成・教員を配置する。 ●バス車内ではマスク着用を呼びかけ感染対策に気をつける。
3. あしきた・まちのこども園着・水害のお話を聞く あしきた・まちのこども園の前田園長先生より昨年の熊本豪雨による水害の被害についてお話を聞く。 地球温暖化について考える。	●水害の被害にあった児童もいることから、一人一人の状況や心情に配慮した対応をする。
4. グループに分かれて自己紹介 6グループに分かれて、それぞれ名前と好きな遊びを話して自己紹介を行う。	●一人ずつ自己紹介ができるように仲立ちをする。
5. 「やおやのお店やさん」の手遊びで交流 全員で輪になって座り、「やおやのお店やさん」の手遊びを、魚屋さんや水族館のバージョンに変えて実施する。	●子どもたちの緊張が解けるように楽しく行うよう心がける。戸惑っている子どもにはそっと声をかけ寄りそう。
6. 佐敷川緑地公園に移動し昼食	●公園までの移動は、整列して歩き、車に気をつける。

<p>歩いて佐敷川緑地公園に移動し、昼食のお弁当を食べる。感染防止の観点から、園ごとに分かれて昼食をとった。</p> <p>7. 河口干潟でしおまねき観察会 河口干潟でしおまねき観察会を実施し、干潟にすむ生物を観察・採集する。採取した生物の一部は園に持ち帰り飼育した。ハクセンシオマネキやアシハラガニ、トビハゼなどの生き物を採取した。</p> <p>8. 着替え・帰りの準備・お別れの会 手足を水で洗い、着替え、帰る準備をする。 お別れの会で、お礼を言ってバスに乗車する。</p> <p>9. 帰着</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●軍手・マリンシューズを着用し、牡蠣殻などで怪我をしないよう注意を呼びかける。 ●穴の中や石の下などに生き物が隠れていることに気づかせる。 ●採取した生き物は自然に戻し、園で飼育できるものだけを持ち帰るようにする。
---	---

3. 今回の活動の自己評価

<ul style="list-style-type: none"> ➤ まん延防止等重点措置の影響により、当初の計画から全ての予定を1ヶ月ほど遅らせての実施となり、芦北では感染防止の観点から羽釜でご飯を炊く活動を中止するなど様々な制約はあったが、芦北での体験と事前事後学習も含めて実現することができ、変更も功を制し、大変有意義な活動となった。 ➤ 芦北では、最初は緊張した様子の子どもたちだったが、干潟で生き物を探す頃にはすっかり打ち解け、協力して生き物を探す姿が見られた。今年の園児は、昆虫などの生き物や植物など自然への関心が高かったが、芦北での干潟の活動や水害の学びを通じて、自然への興味関心がさらに広がった。芦北に向けて、子供同士で意見を出し合いペアを作るなど、仲間づくりとしても意義ある活動となった。 ➤ 興味が拡散し落ち着きがないと心配される子や発達の心配のある子も、干潟では生き生きとし楽しんでいた。海で五感を刺激する体験活動は、そうした子にとっても意義深いものであることを再認識した。 ➤ 事後学習として実施したお魚捌きは、怖がる子もいるかもしれないと予想していたが、やりたいと声をあげ皆意欲的で、今日はお魚パーティだと言って楽しむ姿があった。また事後にはこれまで描いたことがなかったと言って、凶鑑を見ながらサワラなど調理した魚の絵を自ら描いていた児童もいた。振り返りでは、「なんで魚の心臓はあんなに小さくて黒いんだろう。」、「魚からあんなに血が出るのはびっくりした。」、「魚はどういうところに血が通っているのだろう。」、「魚がかわいそうと思ったけれど、魚屋さんがいるから魚が食べられる、お寿司も食べられる。」という発言があった。本カリキュラムで海の生き物観察から、食べ物・暮らし・職業理解にまで思考が広げることができたのは大きな成果である。 ➤ 芦北での干潟観察だけでなく、事前学習・事後学習と3回にわたり連続で実施することで、学びを深めることができた。お魚さばきを計画当初は事前学習と位置付けていたが、事後学習に変更して実施し、より良いカリキュラムとなった。
--

- ▶ 本園だけでなく、交流したあしきた・まちの子ども園からも毎年恒例の行事にしたいと思うほど有意義な活動だったとの意見をいただいた。双方の園にとって貴重な交流の機会となり、海での自然体験を通じて、異なる環境で暮らす児童が交流することができる意義を再確認することができた。

4. 今後の課題

今年初めての実施となったが、期待以上の成果が得られ、園の行事として毎年継続・発展させていきたいと思う内容となった。5歳児が芦北に出発した後、4歳児が来年は僕たちが芦北に行けると期待している様子だった。継続できる方法を模索したい。

芦北では羽釜ご飯を中止したが、その分干潟の生物観察に集中して取り組むことができ、スケジュールもスムーズだった。来年度も実施する際には、今年同様に羽釜ご飯はない方がよい。

コロナで1ヶ月延期し、芦北での干潟観察が少し肌寒い季節となった。計画していた9月の実施が、干潟観察にはちょうど良い気候だろう。

交流したあしきた・まちのこども園が来月引越しすることとなり、次年度も継続して実施する場合には海での自然体験の場所を再度確認する必要がある。

5. 本学習内容報告書活用にあたっての留意点

特になし